

## 令和7年度生成AIを活用した学びのサイクル実証事業実施報告書

学校名

真庭市立勝山中学校

## 1 本事業により目指す子どもの姿

## (1) 目指す子どもの姿

生徒が自ら課題を見つけ、家庭学習をすることができる。

## (2) 生徒・教員の現状

本校の生徒は家庭学習の習慣が身につけている生徒の割合が低く、1時間以上勉強をしている生徒は半程度しかいない。家庭学習の習慣をつけることを目的に「学びnote」（自主学習ノート）の提出を毎日課しているが、提出する生徒は固定化されている。

教員は校内研修に意欲的に参加をしている。研修で「家庭学習につながる課題の出し方」などについて研修をしたこともあったが、あまり成果が見られなかった。ICTの利用に関しては個人差がある。

## 2 取組内容

## (1) 家庭や授業での使用

## ① 学びnote（自主学習ノート）での活用

「学びnote支援」というチャットを活用すると、例題やノートの作り方のコツなどを提案してくれる。

## ② 予習をしてから授業に臨む

生成AIを使って次時に学習することを予習する。授業では、予習してきた内容を生徒同士で確認をしたり、授業の終わりには小テスト形式で生成AIが出す質問にOKができるまで答える。

## ③ 英語の授業での活用

(i) 生成AIを相手に英会話練習をする。

(ii) 英作文アシストを活用し、よりよい英文を作る。

## ④ 実力テスト対策問題を作成させる。

ワークや教科書も参考にしながら生成AIと問題を作成する。

## ⑤ 作文添削・推敲に活用する。

書いた作文を生成AIに添削してもらい、より良い文章になるように推敲し、ブラッシュアップした文章を他の生徒の前で発表をする。

## (2) 面接練習での生成AIの使用

高校入試の面接練習用に、試験官役として模擬面接を行うプロンプトテンプレートを作成。

## ① 生徒は生成AIを相手に面接練習を行う。

(例) 生成AI：「中学校生活で1番頑張ったことを教えてください。」

生徒：「部活です。」

生成AI：「部活動に一生懸命取り組んできたこと、とても素晴らしいですね。具体的にどのような部活をしていたのか、そこでどんな問題を克服したかや何を学んだのかを詳しく説明していただくと、さらにあなたの努力や成長が伝わりますよ。」

## ② 生成AIのアドバイスをもとに改善を行う。必要に応じて生成AIに相談をしながら考える。

## ③ 教員との面接練習に臨む。

生成AIからは前向きなコメントをもらえるので生徒もやる気がでる。また、生成AIと何度か練習をした後に教員と練習をするので、ある程度考えられた状態になる。

本来は教員が一人一人に時間をかけて行っていたが、最初の取り掛かりとして生成AIを活用することにより、生徒が自らの目的やペースで進められ、その分、個別に指導が必要な生徒と関わる時間を増やすことができた。

### 3 生徒・教員・保護者からの評価

#### (1) 生徒からの評価

使用開始当初は、直接答えを教えてくれないという特性に戸惑っていたり、使用をあきらめている姿が見られた。しかし、「分からないことは生成AIに聞いてみたら。」という教師の声掛けで、分からないことがあれば、とりあえず生成AIに聞いてみるという姿が多く見られるようになった。

他のAIと違い、答えをすぐに教えず、ヒントで解答を導き出す点が学習に役立っていると感じている生徒が多い。

全校生徒の約83%が家庭学習で生成AIを使用したいと考えている。

#### (2) 教員からの評価

生成AIを活用することで、生徒一人ひとりに合わせた指導がしやすくなり、「個別最適な学び」を進めることができる。特に、難しい問題を解く場合には粘り強く対話をする様子が見られる。

しかし、プロンプトの内容が不十分なことも考えられるが英語においては文法的な誤りがない場合でも、より良い表現に変えようとアドバイスをしたり、未習内容を提示することもある。また、国語の作文添削でも生成AIから長文で返答をされ、それを読み取るには文章読解力が必要になってくる。

すぐに答えが出ないという生成AIは、学習に前向きな生徒にとってはやり取りから学ぶこともあるが、学習に苦手意識のある生徒にとってはもどかしさを感じている様子も見られる。

#### (3) 保護者からの評価

使用前のアンケートからは「生成AIの活用で、苦手の克服や毎日の学習習慣につながることを期待している。」「タブレットが遊びの道具になっているので、情報収集や勉強などに利用できれば大変便利な道具」などの意見があった。「タブレットを持ち帰ったときに学習に使っているのか分からない」という意見も多く、家庭学習で使用するには、生徒と共にタブレット使用のルールを丁寧に確認することが必要である。

### 4 成果と課題

#### (1) 成果

答えを出さない生成AIなので、答えを導き出すために何回も生成AIとやり取りを繰り返す必要がある。それゆえ、生徒自身が粘り強く考える習慣がついてきていると感じている。また、予習で生成AIを使うことにより、普段人前で話すことに積極的でない生徒も、自分の考えを安心して発言しやすくなっている。教師には言えなくても、生成AIには「分からない」と素直に言えることは勉強を苦手としている生徒にとっては力強い味方になっていると考えられる。

教員の活用については、今年度の研究主題である「夢に向かって、失敗を恐れず挑戦できる学校」のもと、各教科や分掌で活用を始めている。職員室内で活用例を交流している姿も見られ、若手から年配教員へのOJTにも繋がっている。

授業においても、理科や社会で予習で使ったり、英語科においては「英作文アシストモード」を活用している。また、長文読解に教科書、和訳等のヒントカード、生成AIのいずれかを使うことを委ね、個別最適な学びの実現にも役立っている。

#### (2) 課題

家庭学習において、生成AIと手書きで行うかのどちらが良いかを生徒に調査したところ、生徒の意見は半々に分かれた。今の入試制度などを考えても手書きでノートにまとめさせる習慣は続けていくべきだと考える。その中で、生成AIをどのように家庭学習で使うかは教師の課題の出し方によると考えられる。教師が単元を見通した授業計画を行うことで、生成AIを使う場面と教科書を使う場面など、役割分担を行い、適切なプロンプトの入力や授業と家庭学習をつなげる工夫などについて研修等を行うことで、すべての教員が生成AIを効果的に使い、生徒の家庭学習の習慣や基礎学力の向上につながっていくと考える。

家庭学習での使用を目標としていたが、それを行うためには毎日タブレットを持ち帰りをさせる必要がある。持ってくるのを忘れて、本来の目的以外で使用することも考えられ、持ち帰りを徹底できなかった。今後、タブレットの使用についてのルールを生徒と共に考え、実践していく必要がある。